

ていねいな暮らしのあつたころ

佐野二彦の撮った伊深の里山

「行商の端切れ売り」

伊深の人は、主に西方の町である関へ買い物に出掛けました。伊深へは、物を売り歩く行商が訪れることも多く、そこで買い物をすることもありました。

行商には、不定期と定期があり、行商人は農家の門先に店を広げ、近所に声を掛けて回ります。適当なものをみつくるって訪れてくれる行商のおかげで、忙しい農家は出掛けていく手間が省けました。また、物を選ぶときの会話も楽しみのひとつでした。

写真は、端切れ売りが「シンドカゴ」からきれを出して広げている様子です。昔は、古くなった着物をほどこき、布団を作ったり、端切れで前掛け

を作ったりしました。何度も使いまわしたきれを最後には何枚か重ねて雑巾を作るなど、物を大切に使いました。



「端切れ売りが来て店を出す」

昭和38年4月22日撮影